The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	黒川能をめぐる思想と実践の歴史民俗学的研究
Author(s)	石山, 祥子
Citation	大阪大学, 2016, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/59504
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（石山　祥子　　）	
論文題名	黒川能をめぐる思想と実践の歴史民俗学的研究

論文内容の要旨

本論文は、山形県鶴岡市黒川（以下、黒川地区）で伝承されている民俗芸能・黒川能を具体的事例として取り上げ、この芸能の今日的状況を構成し、近代以降にこの芸能をめぐって蓄積された多様な思想や実践の諸相について、歴史民俗学的観点から論じたものである。黒川能は、14集落の氏神社である春日神社（黒川字宮の下）の氏子によって継承され、演じられてきた神事芸能である。黒川地区最大の祭礼行事である王祇祭（毎年２月）の折、民家（当屋）で舞われる能としても黒川能はよく知られているが、地元の祭礼だけにとどまらず、県内外で旺盛な演能活動を現在までつづけている。

近代以降の黒川能にとって大きな転機となった出来事はいくつかあるが、本論文では大きく３点に分けて論じる。１点目は明治時代の能楽による「発見」、２点目は昭和10年代の真壁仁による「農民芸術」としての再発見と以降の活動、３点目は昭和中期に祭りの中の能として表象された出来事である。そこで、本論文では祭礼行事や神事芸能としての側面からは看過されてきた、黒川能の芸能としての近代以降の歩みと、その中で生み出され、蓄積された思想や実践が、いかに今日の活動や表象を規定しているのかを明らかにし、近代以降の社会状況の変容に対応しながら、自らの論理や規範に基づいて活動してきた集団として、黒川能を描き直すことを主たる目的としている。

明治時代、「能」としての黒川能にいち早く関心を寄せたのは、能楽研究者などの「能楽（＝五流派の能）」に関係する人びとだった。それから今日まで、もっとも研究が蓄積されているのは、能楽／能楽史研究の分野である。そこで、【第１部　黒川能をめぐる近代の表象と実践】では、黒川能を論じる前提として、明治時代を迎え、幕府の式楽から近代国家に相応しい国民芸術として再出発をはかった「能楽」の近代化の過程について、先行研究を整理し、考察した。第２章では、明治年間に人気を博した歌舞伎と能の折衷芸能・今様能狂言を取り上げ、この芸能を題材とした小説、当時の新聞・雑誌記事、写真、引札などの分析を通じて、家元制度の枠外で活動する能の活動の実態と、近代以降、能楽から排除される過程について論じた。流儀に属さない専業役者による一般大衆向けの能の系譜は、今様能狂言を最後に途絶したとされるが、黒川能もまた、いずれの流儀にも属さない能であり、今様能狂言の系譜を引き継ぐ非能楽系の演能集団の一つといえる。本論文ではこのような視点に立ち、能楽とは異なる論理や規範に基づいて実践する演能集団として黒川能を捉え直し、論じるところに一つの特色がある。

第３章では、能楽による黒川能の「発見」について論じた。主に取り上げたのは、国文学者で能楽研究者の大和田建樹の黒川村来村（1903年）である。大和田は、黒川能を「能楽史研究の一大材料」として「発見」したことは先行研究でも指摘されてきたが、本章では、これまであまり言及されていなかった史料として、大和田の紀行文「歌まくら」を用い、大和田が「連合和熟」と表現した、能楽と黒川能の最初期の接触について詳らかにした。しかし、能楽と黒川能との関係は、1910年に黒川能初の東京公演で大きく変化する。第４章では、10年公演について、当時の在京新聞の記事や雑誌記事などの資料から、黒川能が東京の観客にどのように受容されたかを論じたが、本章ではとくに、能楽研究者で能楽堂の設計者としても知られる山崎楽堂による批評を取り上げた。能楽の音楽理論を駆使し、山崎は「理論上嘘」、「無規律」などの厳しい言葉によって、黒川能の謡や囃子、所作に対する批判を展開したが、本論文では、この山崎の能楽を絶対的価値基準とする態度について、当時の能楽研究の状況とも関連させながら論じた。つづく第５章では、1936年に行われた２度目の上京公演を取り上げた。鶴岡市出身の能楽評論家で、能楽書院の主宰だった斎藤香村の尽力により、この公演の成功によって、能楽における古曲や稀曲を実演する〈古風〉な能というイメージ戦略が図られ、その評価が定まった、黒川能にとって画期的な出来事だったことを、当時の新聞・雑誌記事、役者側の手記や記録などの分析を通じて明らかにした。

だが、黒川能を〈古風〉な能とする根拠の一つであり、能楽側から関心が寄せられた黒川能が保有する古曲や稀曲の大半は、明治半ばから始まる「所演曲拡大期」と呼ばれる時期に、黒川能を演じる二つの演能集団（上座と下座）の間で演目をめぐって繰り広げられた、分配協議や新曲登録合戦などの出来事を経て、新たに保有曲として登録され

た、近代の所産だったのである。そこで、第６章では、この所演曲拡大期に起きた一連の出来事について、時期ごとに分けて整理し、役者の家に残された史料や謡本などから、この所演曲拡大期の実態にせまり、両座制をとる黒川能ならではの論理や規範のもとで行われたユニークな実践と位置付けて論じた。このような演目をめぐる実践は、神事芸能としての視座や〈古風〉な能というまなざしからは捨象されてきた部分といえるが、この時期を経て獲得された、本論文で確認された約590曲を数える大量の保有曲は、新たな資源として近代以降の黒川能に新展開をもたらしたのである。

【第２部　〈能を舞う農民〉の発見と展開】では、黒川能を「農民芸術の古拙の美」、「芸術追究と勤労生活の統一表現として一つの典型」として見出し、終生、黒川能と王祇祭の紹介、研究に心血を注いだ、山形市出身の詩人・真壁仁の思想と実践について論じた。本論文では真壁仁を研究者としてではなく、文学活動と農業の両立に苦悩する一人の農民としての真壁に注意を払い、その真壁と黒川能役者たちとの交流の軌跡に着目した点に特色がある。真壁仁が偶然訪れた王祇祭で黒川能を目にしたのは、1938年（昭和13）のことだった。２年前に36年公演を経験した黒川能の役者にとって、能を介して接触する外部とは、能楽や民俗学の研究者のみであり、黒川能の〈古風〉な面や神事的側面に注目が集まり始めたころである。ところが、王祇祭で黒川能をみた真壁が発見したのは、日焼けした逞しい身体で能を舞う農民の姿だった。真壁はその姿に衝撃を受け、黒川能の研究にのめりこんでゆく。この真壁による発見は、現状のままの黒川能のありかたが肯定され、能楽あるいは能楽史という価値基準、能楽の参照項という従属的立場からの解放を意味する。〈古風〉な能として切り取られ、一人歩きしつつあった黒川能を、真壁が「信仰と芸術と生活との完全な一致」と再評価したことによって、王祇祭や日々の生活、農民の身体性と黒川能が改めて関連付けられ、再文脈化した経緯について、真壁の著書や自筆ノートなどを分析し、論じた。この再発見、再評価は、戦後とくに大きな意味を持ち、黒川能の“現代化”をうながした重要人物として位置付けた。

【第３部　〈農と能のムラ〉の確立とゆくえ】では、主として1960年代から現代までの期間の出来事について取り上げ、〈農と能のムラ〉というキィワードを軸にし、前章まで一旦切り離して論じてきた黒川能と王祇祭が、不即不離の間柄になるまでの過程と、それによって生じた不可逆的な状況について論じた。第11章では、地元で「黒川能ブーム」として今でも記憶されるきっかけとなった、平凡社の雑誌『太陽』の1966年２月号の特集「雪国の秘事能」についてである。この特集は真壁仁の『黒川能』に感銘を受けた平凡社の編集者によって企画・取材されたが、この特集そのものが真壁仁の『黒川能』や詩の世界を、カラー写真を多用してヴィジュアル化したかのような内容であることを、特集の写真や誌面構成などを分析し、明らかにした。さらに、王祇祭と黒川能だけを切り取るのではなく、四季の移ろいや人びとの生活とともに描き、〈農と能のムラ〉ともいうべきイメージが提示されている点についても考察した。この特集は当時大きな反響を呼び、翌年以降、王祇祭に大勢の観光客が訪れるという現象を引き起こした。このブームの背景について、本論文では、担当カメラマンだった薗部澄に着目し、高度経済成長期に経済構造の変化による人口の大移動によって大量発生した故郷喪失者の一人として薗部を捉え、薗部と同じく「ふるさと」を喪失し、希求する人びとに、薗部の切り取った「秘事」の風景が受容されたことも、王祇祭に多くの人びとの足を向かわせた一つの要因であると指摘した。第12章では、2008年（平成20）にフランス・パリ市で行われた下座による公演を題材に、筆者が実際に現地の会場で見聞きしたことを中心に論じ、前章までで論じてきた黒川能独自の論理や規範のなかで、どのように能が演じられ、役者に経験されているのかを明らかにした。第13章では、現在の王祇祭の状況について、とくに当屋にかかわる事柄を具体例として取り上げて、現在、王祇祭が直面している問題について検討した。

終章では、フォト・ジャーナリストの大石芳野による写真集『黒川能の里：庄内にいだかれて』（2008年）を手がかりに、大石が本書を通じて問題提起した「地域」や「当事者」の捉え方について考察し、本論文のまとめとした。今日、その規模が大きいほど、地縁血縁のみで成立、完結する民俗芸能や祭礼行事は減少し、従来からの伝承母体だけで維持することはますます困難になっている。民俗芸能や祭礼行事を伝承する「地域」とはどこを指し、「当事者」とは誰を指すのか。観光客やボランティア、行政やカメラマンなどは、芸能や祭りを行う当事者とは区別され、その周縁に位置付けられるが、彼ら／彼女らもまた、芸能や祭りの場を構成し、当事者以上の「熱情」をもって芸能や祭りの維持や継承に腐心する可能性を孕んだ存在であるといえる。本論文で取り上げた大和田建樹や斎藤香村、真壁仁らは、まさにそのような立場にあった人物であり、黒川の人びとと親しく交流し、能や祭りに深い理解を示した存在でもあった。制度や法律、政策や社会的変容などと同様に、黒川能や王祇祭の表象や実践に、変化や刺激をもたらしつつづける、彼ら／彼女らの存在を明るみに出しながら、近代以降の黒川能もまた、静的な存在ではなく、絶えず外部との交渉を持とうとした動的な存在であると指摘し、そこから生まれた思想や実践の諸相の集合体こそが現在の黒川能であることを論じた点に、本論文の特色があるといえるだろう。近代以降に黒川能が経験した出来事を通して、思想と実践の双方から近現代の黒川能をめぐる営みの一端が明らかになったとすれば、本論文の目的はひとまず達成できたといえる。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　石山　祥子　）			
論文審査担当者		（職）	氏　名
	主 査	大阪大学　准教授	北村　毅
	副 査	大阪大学　教授	北原　恵
	副 査	大阪大学　教授	杉原　達
	副 査	大阪大学　名誉教授	川村　邦光

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

様式７別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：黒川能をめぐる思想と実践の歴史民俗学的研究

学位申請者　石山 祥子
論文審査担当者
主査　大阪大学准教授　北村　毅
副査　大阪大学教授　北原　恵
副査　大阪大学教授　杉原　達
副査　大阪大学名誉教授　川村 邦光

【論文内容の要旨】

本論文は、山形県鶴岡市の黒川能の歴史的な展開を考察するとともに、能楽などの外部からの影響を受けつつ、多様な経験や思想を吸収しながら実践してきた黒川能の動態的な様相を探究して明らかにすることを目指している。

本論文は、序章・終章を加えて、第一部「黒川能をめぐる近代の表象と実践」、第二部「＜能を舞う農民＞の発見と展開」、第三部「＜農と能のムラ＞の確立とゆくえ」の三部構成からなる。序章では、黒川能を概説し、黒川能と能楽に関する先行研究を批判的に検討し、近現代を生きてきた黒川能の思想と実践を究明することが研究課題として設定されている。

第１部では、黒川能を論じる前提として、近代国家に相応しい国民芸術として再出発をはかった能楽＝五流派、また能楽の家元制度の枠外で活動する今様能狂言などの芸能が能楽から排除される過程について論じている。黒川能も非能楽系の演能集団の一つであるとする視点に立ち、1903 年に和田建樹によって「能楽史研究の一大材料」として評価された黒川能が、1910 年の東京初公演では能楽を価値基準として批判されたことを指摘する。1936 年の２度目の上京公演では、能楽で古曲や稀曲となっている古風な能を演じて成功を収めたが、黒川能の演目の大半は明治期半ばから始まる「所演曲拡大期」に新たに登録されたものであり、その結果、黒川能に新展開がもたらされたことを資料の発掘を通じて明らかにしている。

第２部では、1938 年の黒川能との邂逅以来、黒川能と関わって新たな地平を切り開いた真壁仁の思想と実践について論じている。ここでは、真壁が黒川能役者と交流する中で、「農民芸術の古拙の美」、「芸術追究と勤労生活の統一表現として一つの典型」として見出した黒川能を、能楽・能楽史の価値基準から解放し、「信仰と芸術と生活との完全な一致」という点で評価し、王祇祭や日々の生活、農民の身体性と結びつけたことを明らかにしている。

第３部では、真壁も関わった、雑誌『太陽』1966 年２月号の特集「雪国の秘事能」を分析対象として、同誌が、王祇祭と黒川能だけではなく、黒川の四季や生活をビジュアルに描き出し、「農と能のムラ」のイメージを提示して、高度経済成長期の都市化によって「ふるさと」を喪失し希求する人々の大きな反響を呼び起こしつつ、黒川能ブームを生み出した経緯を明らかにしている。また、黒川能のパリ公演、現在の王祇祭で当屋の状況を調査し、黒川能の直面している演者と生業、観衆への対処などの問題につ

いて検討している。終章では、黒川能・王祇祭を介して、民俗芸能・祭礼を伝承する地域や当事者に関して考察し、研究者や観衆などの来訪者も芸能や祭りの場を構成し、維持・継承していく存在であると問題提起している。

【論文審査の結果の要旨】

本論文では、能楽を絶対的な価値基準とせず、能楽も黒川能などとともに能狂言という芸能の一形態とする視座の下で、黒川能に関連する近世以降の文献史料を踏まえた歴史的な研究とともに、現地・黒川でのフィールドワークを行って、黒川能の近現代史を明らかにし、黒川能を担った人びとの実践と思想を究明することを目指しているところに大きな特長があり、すぐれて意欲的な論文となっている。以下、独自の論点が提示され、評価されるべき点を挙げていく。

本論文は、黒川能を能楽史研究において評価した大和田建樹の黒川能役者との交流を綴った紀行文、1936 年東京公演の際に黒川能役者自身が演能の実感や観衆の反応を記した日誌類、真壁仁の自筆ノートなど、先行研究で用いられなかった資料を発掘して、黒川能の歴史的展開や黒川能に関わった人々の思想と実践について精緻に描き出したが、このことは黒川能研究に新たな地平を切り開いた点として大いに評価できよう。

本論文は、近世に確立された神事能としての黒川能の制度や組織に関する歴史的な考察から始まり、明治期に成立した観世などの五流派の能楽と比較・対照して、黒川能の独自性を明らかにしている。また、明治期以前の猿楽とはかなり様相を異にした、能楽師や能楽後援者、能楽評論家、能楽研究者、能楽ジャーナリズムなどによって構成される能楽体制の形成・発展プロセスも明らかにして、演能において能楽を絶対的価値基準とする能楽の覇権主義を諸資料から析出し、能楽の近代ともいうべき諸相の展開プロセスを詳細に論述しつつ明らかにしていったことは高く評価できる。

1936 年の２度目の東京公演では、能楽では廃絶曲となっている《鐘巻》を上演して、能楽師や能楽評論家などから古風な能と高評されたが、この「所演曲拡大期」に新登録された約 590 曲を数える大量の保有曲のひとつである《鐘巻》などの演目を通して、黒川能の古風イメージが確立された。この時期、能楽研究者などが能楽とは異なる歴史的な蓄積を有する神事芸能として再評価した黒川能は、黒川能役者によって継承・存続されていったわけだが、その経緯について、多くの資料、特に黒川能役者自身が記した日誌を用いて克明に叙述した点は本論文の精華といえる。

さらに、黒川能の新たな局面を切り開いた真壁仁の農業と思想の営為について、戦中から戦後にいたる時代状況と関連させながら、真壁の格闘した思想史的テーマを究明するとともに、黒川能・王祇祭、またその担い手たちの直面していく困難な事態を浮き彫りにしたことは、民俗学や民衆思想史の領域に大いに貢献する業績となろう。

なお、黒川能の担い手である上座と下座については、歴史的な展開プロセスを踏まえつつ、両座の緊張もしくは対抗した関係や構成員について掘り下げて論じることによって、黒川能の現在にいたる、より動態的な様相を描くことができたはずであるが、静態的な記述に留まったことが惜しまれる。とはいえ、こうした残された課題は、もとより本論文の意義を損なうものではなく、今後の研究を深化させていくうえでの課題と考えられるべきものである。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものであると認定する。